

# 丹羽文雄と親鸞 (下)

——小説「青麦」を中心として——

中野 惠海

## 1. 書き出しの文章

——(註1)  
二階の山門に、梯子がたてかけてあつた。十五米のながさだが、二本梯子がつぎ足されて、ほとんど垂直にちかいかい形に立つていた。まん中のところが、ゆらりゆらりと揺れていた。ゆれ方はとまらない。上下する人間にはらをたてているように、梯子は感情的にゆれていた。上つたり下つたりする最中には、梯子は神経質になるらしい。油断のならない梯子の正体であつた。大人は慎重に、梯子の正体をなだめすかして、ずるく上つたり下りたりした(頁五)

これが青麦の書き出しである。丁度、仏法寺では山門の再建工事の最中であつて、この長男である鈴鹿が子供の悪戯心から、長梯子に登るが、途中でこわくなつて立往生して居すくんでしまう。此の書き出しの場面は、一読して著しく主観的な事が感じられる。鈴鹿という子供の眼を通して以後この小説は語りすすめられるのであるが、それがいかにも鋭く、感覚的である。鈴鹿の性質が後述する様にこれ又早熟で羞恥心の強い子供として描かれているので、その背景描写という点に於ても此の事は好適であると言える。それは、青麦全篇を貫ぬく宗教的な事柄、罪とか救いとか言つたものを扱うのにも適しているであろう。客観的リアリズムの手法に於て出発し

た丹羽が、戦後次第に主観的な描写をする様になつて来たことについてはその著「小説作法」の中でこう言つて  
いる。

——従来の私は、行為を描写することに熱心であつた。戦後の私はそうしたりアリズムでは満足が出来なくなつて、は  
み出すリアリズム、作者は作品の前面に顔を出さねばならないと、<sup>(註2)</sup>実験小説を云々しはじめた。作者の主観を強調する  
ことに重きを置くようになった。(同書、頁二八五)

又其の簡潔な印象的な、そして洗練された筆致には、彼の小説の出發に強い影響を与えたと思われる。<sup>(註3)</sup>志賀直哉  
を思わせるもののある事も見逃せない。

——落ちて来る土は、参道に落ちると叩きつけられたように平たくひろがつた。すでに参道には点々と粘土の死骸があ  
つた。(頁六)

と言う風なものなど。それから、玄関と下廊下のあいだに新しく造り直された鈴鹿の勉強部屋の描写に「ただ  
つびろい夜の境内にむかつて、鈴鹿の部屋だけが目をあいていた。」(頁五三)とあつて、疑人法的描写も目立つ。  
殊に鈴鹿が、そで子という幼友達の子を、かくれんぼに誘つて本堂の内陣に這入りこむところで、

——百年ちかくも、一度も陽を受けていない闇には、なにかそれだけの気味のわるさが淀んでいた。(頁三三)

と、闇を単に光線の露わに射さないところと消極的に言わないで、「闇が動き出す」と言つた風に強く書くのは、  
戦後の作品「哭壁」での新築した旅館の闇や天井の描写「飢える魂」に出て来る暗い部屋の描写などにも、あく  
どい程のものがあり、この青麦にも内陣や庫裡やの闇のそれとも共通し、最後に出て来る本堂の下の土を「百年  
の歲月、陽の目をみたことのない土は微粒子に還つているらしかった。本堂の床下の土であつた」(頁二〇九)と

言うあたりにも此の気分がただよつてゐる事である。共に、主観的な描写と言つたものだが特に丹羽の場合の闇には、罪というもののくらさがにじみ出て来る態のものであつて、これも戦後の丹羽の一つの特徴である。

## 2. 鈴鹿の羞恥心

又、鈴鹿の異状なまでの羞恥心と言うものを用意してみると、この闇の効果が一層強められていると見られる。内陣の闇から出たところで義母の叱責を受けるころでは、

——「なにしとるの、そんなところで……」義母が、なにを發見したというのか。何を嗅ぎつけたのだ。(頁三三三)  
——ふたりは二度と、以前のようにはなれないと鈴鹿は思つた。恥しいところを、大人に押えられたのだ。もと通りになれるはずはなかつた。…(中略)…義母の叱り方は單なる子供のあそびを叱る調子ではなかつた。かれは絶望した。かれの心はふかく傷つた。義母が何を嗅ぎつけたというのか。子供のあそびの中に、大人びた、あるいはやらしいものを描いたのではなかつたか。このことは、また、かれのこれからのながい生涯に影響をあたえずにはすまないという気がした。それというのも、義母の絹が懸念したような出来事に対して、かれにその下心がなかつたとはいえないからである。情熱や恋愛については何も知らなかつたが、かれは本能的に義母の嗅ぎつけたものを知り、いまから氣まわりわがつていた。(頁三三三)

とあつて、甚だ深刻である。性的なものに対する少年の日の感覺的な本能的な羞恥の感情に、甚だしく罪の感じが入り込んでゐる。この種の傾向はよくあるものではあるが、例えばこれを室生犀星の「幼年時代」「性目覚める頃」等と比較してみても丹羽のは又特別に強い。後年、この時の少女そで子との關係が生じた時、そし

て又、父如哉の情痴の生活を嘆ぎつけた時、父のには濁つたものがあり、自分等の中には純粹な、きれいなものがあると比較しながらも、

——あれが、罪だつたらうか。

たとえそで子と正当に結婚ができたにしても、内陣のたくらみをごまかしたり、抹殺することはできそうになかつた。

(頁一〇九)

とまで追求するしつこさがある。学校の友達から、ひそかに借りた、まくら草紙が偶然父の如哉の目にふれたらしい時の気持でも、

——父のかおが正視できなくなつた。今後は何、十年の後まで、父の目を正しく見ることはあるまいと思われた。(頁六七)

と言う風であり、夜の茶席で大胆に行われる父如哉の情痴の世界を、窓の近くの桜の木に登つて覗きみしている気持を、「こうしている限り、自分は父と子のつながりを切りつづけている。希望のないものにひきずり下している。それを子が着々とやつている。」(頁一一七)と述べ、そで子が或る夜妹に起されて、父と母の場をのぞき見した話を彼にした時も、彼は羨やましさを覚える。茶席のことを思い出し比較し、そで子のおどろきは少しも汚くなく、「おもしろがつているのがきれいだった。両親の油断を、ほがらかに笑つてやればよいことであり、罪とはとおいものであつた。姉をよびおこして、廊下のはしから見物している姉妹が健康に感じられた。興味もち方が、あかるくて、健康であつた。かれは、恥じた。桜の木にのぼつたことが、いやらしかつた。」(頁一一六)のであり、こんな比較をしなければならぬことがうらめしかつた、と言つているが、大人の情事の受けとり方

が、そで子とは大きく違つてゐる。彼のはひどく内省的で、いかにも羞恥の情が激しい。自身の心の内奥をそこに倒影して、はずかしがるのだ。彼には桜に登つた事も悔恨であり、好奇心をいだいた事がそもそも悔恨であり、父の振舞いもその相手の女梅原さんの振舞いも、自分が何となく腹を立てた事も悔恨であり、義母がそれを知つた事も、そしてその義母の苦悩を知つた事も、凡てが悔恨であつたりする。それは「そで子がそばにいるのに、このような重苦しい思いを味はうのは、あるいは人間というもののむなしさが、少しづつ判りかけていたせいかも知れなかつた」(頁二六)と言つてゐる様に、そして又、父如哉が山門から落ちて入院した為に通つて来る役僧の伊園を見て、「いま自分は人生のまん中にあるのだと、鈴鹿は伊園にいたかつた」(頁二五)とある様に、人生的な、人間的な、その暗黒面への開眼の早さや、その強さを物語るものである。それは寺院生活というもの、それもこの家庭の様なその乱脈さが強く刺戟したものである。

——ぼくはいま、人生のまん中にいる！ (頁三五)

この言葉は彼を中心に、祖母と生母が、鈴鹿をふびんがつて泣くと言う大げさな愁嘆場に置かれた時にも出て来て、この場合は、大人の秘密の中にまき込まれた感じの、やゝ皮肉な表現ではあるが、

——仏法寺の血は混濁している！ (頁八九)

と言う風なところに強く結びつく言葉でもある。鈴鹿の環境とその重苦しい寺院の空気。彼の人生開眼は罪の意識に強く強く支配されたものであつた。

## 3. 鈴鹿の坊主嫌い

鈴鹿が羞恥心の強い子供として描かれている事に關聯して、彼が父の職業である僧侶を嫌う心の烈しさにも注目したい。彼は檀家の者から「坊ちゃん」(ポウチャン)と呼ばれるがこれは坊つちやんの意味と坊主の意味がいつしよになつたもので、「この呼び方をされると、蠟燭がとけて流れて、まったく別のかたまりに變つてしまうように自分の運命がのぞまぬ形に變えられる気がした」(頁一四)と言ひ。丹羽自身、中之島公会堂での講演では、

——<sup>(註4)</sup>この呼び方をされると、ソツト背中が寒くなるような思ひでとても嫌だつた。

と述べている。

御布施を貰う時でも、読経が終るとそそくさと経文をふるしきになってしまう。仏檀を背にすわり直してからそこに  
出されてある御布施を、一度しまつた風呂敷を開けてから経文の上に重ねて、つつみ直した。「すなおな気持ちになれなかつた。一種の恥しさを感じた。ほどこされて、という屈辱感であつた」(頁一四)というのであり、別の盆に出されてある餅菓子も、白紙に包んで渡されるのが例になつているのに、手渡すのを忘れて、鈴鹿は氣の付かぬ振りをして土間に降りるのである。氣の付いた家人があわてて差し出す「自分の手で菓子を包んで風呂敷にしまうまでの精神にはなれなかつた」(頁一四)のであつて坊主生活をはじめた子供の心の、ぎつくばらんな告白として良く描かれているが、この事は丹羽もすぐその後で言つている様に「そうしてもよかつたので、檀家の手間がはぶける事で」あつたのだ。だがこの様な心は、成人した丹羽にまでつつく氣持であるに違ひなく

丹羽が果してそこ迄割り切つてしまえるかどうか、疑問であろう。

鈴鹿が法衣を着て世話方を連れて、大学卒業の報告とその御礼の挨拶に檀家まわりをする。

——坊主すがたで街を歩くことは恥しかつたが、少年の日の恥しきとはまたちがつたものになつていた。恥しきが卒直にあらわれなかつた。あるところでは、ふてぶてしく法衣すがたをさらけ出しながら、ある場所では、恥しきで息をどめた。若い女に出会う事が、苦手であつた。(頁一二一)

丹羽は、幼い時は文雄を「<sup>(註5)</sup>ブンユウ」長じてからは「フミヲ」と呼ばれたと言うが、坊主らしい名でなかつたから良かつたので、若しそうだつたらその為の恥しさを身にしみて痛感したに違いない。彼の家出の動機については、

——かれは、家出のもつともらしい口実として、末寺の習慣のわるい部分だけを利己的にとりあげた。都合よく、都合な部分はとりあげて、それでは自分の潔白がゆるまないと道義的な義憤をかりたてたが、ほんとうは、坊主というものがいやになつていたにすぎなかつた。(頁一三七)

と、多少後年になつてからの冷静な批判的な言葉で説明しているが、彼は読経のことでも父の様に上手になりたいと思わず、

——ふてくさつてゐるのではない。坊主の仕事のうちこんでいけないものがあつた。子供が漠然と父親の職業をきらうように、鈴鹿はきらつていた。すくなくとも、すなおについていけなかつた(頁七八)

と述べた様に、施されていると言つた屈辱感や、何か潔よしとしない気持。仏法寺の跡とり扱いをされる事を好まず謀叛のやいばをみがいていた、そんな心が基になつていたのであろう。

青麦は、寺院が舞台であり、<sup>(註6)</sup> 自伝的要素の極めて濃い小説である。筆者が寺院生活者であつた事の得失はさて

おいて、ここには鈴鹿の目を通してではあるが、殆んど現在の丹羽がそのまま持つていると思われる様な寺院に対する批判的な言辞が散見し、それが割に赤裸々で手厳しいのと、その内部の人間の言葉だという事が大きな特色をなしている事は見逃せない。例えば、

——仏法寺の生計が百五十軒足らずの檀家におぶさつてることが恥しかつた。かれが稼いでくる三十銭の読経料も大切であつた（頁一九）

とか、「金錢に關してはそこらのサラリーマンのふところよりも心細かつた」（頁一九）と言うあたりは、ずばりと末寺の經濟の真相を言い当てゝいる。又、親鸞の一代記である「御伝鈔」を、親鸞の心理などには一言もふれて居らず、ただただ善男善女が盲目的に隨喜の涙を流す様に、充分な考証も無しに親鸞を貴族化し、永年かかつて巧妙な、からくりを仕上げていると言う事や、寺格堂班が本山に対する冥加金で購われることなどを（頁五九）指摘することは珍らしい事ではないが、さすがに詳しい。説教師の空々しい、輕薄さや、安易なその在り方も極めて生々と描写され、あとで拝読される高田派御書に対しても「今日ではまつたく通用しなくなつた名詞を並べておかしな教訓を垂れた」（頁八〇）と評しており、

——寄席の休憩時間に、もの売りが客席をあくるくように、世話方が粗末な、四角な盆を、あちらこちらにちらばつて歩いた。うけとつた参詣者は、なにがしかの賽錢をいれて、となりのひとに渡した。それが順ぐりにまわされて、最後に世話方が盆をあつめてあるいた（頁八〇）

と言つた風景も、のがさず書かれている。が然し、義母の葬式の場面はその最も手きびしい描写であろう。義母は勿論寺院の妻女である。隣寺の清香寺の住職が来て義母の枕経をあげる。仏法寺の檀那寺が清香寺であり、



又清香寺の且那寺が仏法寺になつているのである。

——坊主が職業であるとはいへ、自分、ただ、ですませてしまふわけにはいかなかつた（頁一二六）

そして如哉ではなく鈴鹿が喪主の様な形をとつている事を、「現職の坊主では妻女の死の喪主になれないものか。良人は妻の喪主となれないものか。鈴鹿は堅苦しい坊主の習慣を滑稽に思つた」（頁一二六）と言ひ、香奠がえしの事でも、

——都合のよいことに、寺自身の葬式の場合は、も、ら、い、放、し、が習慣になつていた。（頁一二八）

と言うあたり、どうもただの嫌悪と言うに止らぬ憎悪的なあくどさがただよう様である。後年、如哉の娘つまり鈴鹿の妹の伊勢子が嫁ぎ先の海潮寺の住職と後妻の不義の為苦しむ、生家の仏法寺に帰されるという如哉が演じたそのままの悲劇に、被害者として立たされるところで、

——因果はめぐるとは、坊主だけがこのむ、こ、ろ、し、文、句、ではなかつた（頁一七三）

と書いたのも同様の筆致で、そう言えば、幼い鈴鹿が御伝鈔を読まされて、座を起つ時しびれが切れて内陣でぶざまに倒れ、這う様にして後門ごちもんを出てから「かれは、中啓と数珠をほうり出した」（頁六六）とあるが、法衣の裾を踏んだり、御経や中啓や念珠を畳の上に置く事は勿体ない事として自然にたしなまれる様に躡けられている寺院生活者としては、いかにも、ぞんざいな扱い方の様で、こんなところにも、僧や寺院に対する前述の様な気分のだよいが感じられないでもないのである。

かねてから坊主が嫌であつたところへ、縁談を押しつけられそうになつたので丹羽は家をとび出したのである

が、丹羽はとにかく、若くして寺院をとび出したのであつて、寺院生活の本当のイヤさをそれ程身に沁みて体験しているかどうか疑問が持たれる。どうしようもない憂鬱と懊惱おぼ、それは単にここに描かれた様な感覚の表面に派手に感じられる様なものばかりではないだろう。青麦には沈滞した愚鈍な檀家のうつとうしい状態も出て来はするがそれも極く表面的である。それは感じが悪い位のところで止められるべきものではないだろう。どうにもこうしもしようのない人生じんせいが描かれなければならぬことだ。御布施も御菓子も、さつさと頂戴し、鈴鹿のおそれた本堂の暗さも、仏像の凝視も氣にならず、とつぷりとこの安定した特別席たる寺院生活に身をおとし込んだ上で人間的苦悩をつぶさになめたのでなければ厚味のある寺院生活者の実体はつかめまい。青麦は見るからに罪と汚濁に満ちみちている様で、案外に綺麗事に過ぎる、うらみがあるのではないか。生噴なますぎる程の女犯はある。併し例えば三部経の飛び読みなんて事は出て来ない。そんな事はなければいけないで、それでよい。罪は女犯に限つた事ではない。然しそんな事が絶対になさそうであるところが氣に懸るといふのである。この事を誇張して言えば、色恋だけの罪を聞くのでは所詮、上手な懺悔を聞くといふ事になりかねない。潔癖は結構だが甘くなつてはなるまい。丹羽が寺院生活者である事から来る小気味の良い、適確な描写も数多くある。然しそこにある去勢された様な倦怠と嫌悪の中に起き伏す本当の生の地獄を体験した者の眼から見れば丹羽のこれらの評言や寺院に対する嫌悪感情は、表面的な甘い感想に過ぎない様に感じられはしないかとも思えるし、言葉の端々に見られる憎しみの色合いが、イヤ味を滯びて聞えるのではないかと懸念けんねんされるのである。青麦につづく大作「菩提樹」に於てこの種の、底の浅さが大きなマイナスになつていると私には思える。

#### 4. 業 苦

この物語の初めに、山門から落下した如哉が、病院では全治しないまゝに、仏法寺に帰り、柔道の先生に背骨の曲つたのを強引に直して貰う時の泣き声の描写がある。

——人間でなくなつた瞬間の声か。魂の底からゆり動かす、人間であることの自覚と安心をとりあげてしまっておそろしい声であつた。人間には、そのような声もあげられる！（頁四一）

物すごい程の強い表現と言える。人間の心の深奥にひそむ、人間ならざるものに対する、並々ならぬ作者の関心がそこに見られる様でもあり、この様なものに対する恐怖や絶望的な不安やりに鋭く注意している事が思われる。この事は作者丹羽が、目に見える世界だけでなしに目に見えぬ世界も又それに劣らず重要である事に気が付き出して来たというその作家魂の発展生長の結果だと考えてよさそうである。丹羽はこのあとで、尚補足の意味か、後年の鈴鹿の見聞した話を書いている。プラットホームで汽車のデッキから落ちて人が死ぬ。汽車の遅れていることで二等車の堂々たる紳士が罵声を挙げる。こんな立派な紳士が何もどなりつける事はなさそうであつた。この事に関して鈴鹿は「紳士はどならずにはいられなくなつたのだ。この紳士は誰よりも気持を動揺てんさせていた、そしてこの衝撃にじつとしていられなくなつた。極端のおどろきと不安につかれて自制する事が出来なかつた」（頁四三）と述べている。人間というものが常識では割切れぬ（つまり目に見える世界丈のものでは解釈し切れない）突飛な衝動に駈られる動物であり、自意識の底に（それは潜在意識と言う丈ではすまされぬかも知れぬも

の) 怪奇なまでの凄惨なものをひそめていると言う事を暗示しているものの様である。(尤も、この挿話ちやうが余り無雑作に投げ込まれた形で、小説構成の上で不手際である。これは作者が語る口調に二り過ぎた結果であつて他にも梅原さんを語る場面にも出て来るが、必らずしも実験小説手法の破綻とは言えなからう。)が、かく解する事で如哉の呻吟の声の本質的な説明の裏打ちとして受取れるのではないか。

如哉の声はこの様に人間ばなれがし、人間がそのような呻きを発する事が驚異であつたのだが、祖母の須磨が七年も中風を患つて死に近くなつた時のその執拗な呻き声もひどい。

——呻き声は、生きながら皮をはがれ、肉をむしりとられる苦痛を聯想させた。須磨の呻き方は、普通と違つていた。いかにも業苦の果という感じであつた。そのうめき声は、人間のすなおな心の位置をゆりうごかして、崩してしまう力をもつていた。(頁八八)

聞いていると狂気じみた、ものものしい気持にさせられ、兇悪にふるまいたい誘惑をおぼえると言うのであり、「業苦の果、須磨は人間の埒外にはみだしてしまつたのだ」と述べている。そして鈴鹿が「昔の悪業の数々からくな往生をさせないのだよ、おばあさん。もつと苦しむがいいんだ。もつと呻くのだ。もつと、もつと……」と袂のこちらから毒づくのである。

如哉のうめきも、須磨の呻吟も舞台は仏法寺という、誠におあつらえ向きのものであり、丹羽の筆は人間の業苦をまざまざと感じさせるに充分の効果を挙げている。語り手は主として鈴鹿であり、この鈴鹿が前述の如き内攻的な自虐性を帯びた早熟の子、罪の感じに鋭敏な性質を持つという事であれば、愈々この事に拍車がかかる訳

である。青麦の描写が著しく主観的で、リズムミカルな調子を持つ事が罪惡に対する一種の詠嘆調となつて青麦を特徴づけその効果を挙げていると言える。

如哉は呻声防止の耳ふさぎまで發明し、一言も苦情を言わなかつたが遂に病人を鈴鹿の隣の部屋に移して鈴鹿の怒りを買うのである。だが年の若い鈴鹿は床につくとすぐねむつた。鈴鹿が馴れたように如哉はなぜ慣れなかつたのか、

——子供の勉強のそばに押しつけて、父親が安らかにねむれるはずはなかつた。そう考えることは、父親という人間を理解する大切な鍵になつたろうが、鈴鹿は残念なことをした。(頁九一)

鈴鹿が家出した事についての如哉の描写に「如哉には打撃になつた。それは、絹の急死と同じふかさの傷を、如哉に負わせることになつた」(頁一三八)とあり、後「鈴鹿は文筆で生計をたてていた。ちかごろ、新聞広告に鈴鹿の名が出るようになっていた。ひとちがいかと如哉は半信半疑であつた。このことは、誰にも言わなかつた。」(頁一五五)とある。子供の鈴鹿の様にその呻吟に慣れないのは如哉の業苦の深さであり、唯のふてぶてしさ文ではとても片のつくものでなかつたのである。並々ならぬものがそこに考えられて良いのであり、子供に押しつけてこの父親が安らかにねむれる筈もない事であつたがそれにも堪えられぬ程にこの病人の声が如哉にこたえたのであるとも考えられる。この心の苦痛、それではまだ、まだるこい業苦そのものの前には、唯の病人の苦呻や、子供に対するうしろめたさや心づかい等はひとしなみに問題でなくなる程のものがあつたと解釈してもよさそうである。丹羽の筆はそこまで行つてゐる。

## 5. 如哉の念仏

作中、仏法寺で毎月十五日行われるお念仏の夜の事がしばしば出て来る。これは近所の信者が集つて、七時頃から九時頃まで、何の話をするでもなくただ念仏を唱える丈の会である。本山からすすめられてやつていながらもなくまた宗派を宣伝する為にやるのでもない。唯この二時間を称名念仏でつぶして帰る様な会で、毎月出席するからその人の宗教心が熾烈であるとは誰も思わない。念仏の中ごろになると如哉は念仏をやめる。念仏を切るしるしに、ちよつと上半身を前にかがめるとびたりと念仏がやむ。如哉は部厚い、小さな本を開けてその一節をやむ。それが親鸞聖人御消息の時もあり、歎異鈔のこともあり、専修寺御書の場合もある。

——如哉は、淡々としてよんだ。ことさらありがたそうに、声に抑揚をつけてよむことはしなかつた。如哉自身には書かれている意味はわかっていたのであろうが、妻女たちにはわからないこともあつた。判らせようという努力はしなかつた（頁四九）

此の様な冷淡な如哉の態度は、鈴鹿に御伝抄の読み方を教えるところにも通じるものである。彼一流の、素氣ない、投げやりな、それでいて一寸脱俗的なおおようさを持つたやり方。頭からよめるものとひとり合点しているやり方。よみそこねたち小学生のようによみ直すであらう、それでよいのだという様なやり方。（そのくせ、如哉自身は読経の名手であるのだが）この様な超然たる如哉の態度。それはふてぶてしいまでに、現実そのもの、虚飾的なものをつつかり脱ぎ切つてしまう様な人生態度をあらわしたものだ。念仏の夜の最初の描写の中に、此の念仏の会の出席者に、或る未亡人と、おまき婆さんが居て、二人共が如哉と肉体関係のあつた事を述べる。そ

して如哉の念仏の姿は、

——如哉はとおい昔のここのように、ひとまえては、あたりまえに二人の女をながめた。とりつくしまのないほど如哉の態度は徹していた。みごとなくらいの、そしらぬかおであつた。おそらく、念仏を唱えているあいだも、そんなことは如哉のあたまにはうかばなかつたろう。(頁五一)

と言う。如哉のこの非人情と言うのか、或は非良心的というのか、みごとなくらいのそしらぬ顔はその悪い反面で、罪の中で最も汚れた、救われ難い、みにくいもの、「聖」なるものとは最も距離のある欺瞞というもの、それをとり出して来て、親鸞主義を強く打ち出そうという作者の意図である。他力の救いを説くのに、先ず罪を強調するという筆法である。最も汚れ切つた、ふてぶてしい生嗅坊主を出してからという事で如哉が描かれている事になつている。

——女たちもわすれて、念仏を唱えているのか。念仏とは、元来、そう、いう、問題とはせつなく関係があるものだろうが  
(頁五一)

という「そう、いう、問題」というのは、人間の罪のことであり、愛、欲の問題のことである。人間の罪とどう対決するかというのが元来、宗教の大問題なのであり、念仏とは浄土真宗、親鸞の教えの最も純粋な宗教的行為に外ならないのではないかというのである。如哉を中心とした罪と汚濁にみちたこの念仏会の人々の姿。いかにも法悦にひたり切つた様なその念仏三昧の姿。蓮如も言つている。高唱念仏のあるところ「信心」はないと。これは殆んど形式化してしまつている念仏であり、無自覚、無反省の極みを思わせるものではないか。唯これは、誇りに唱えるというのでもなさそうである様にも受け取れはする。それは或はもつと、それ以前のもの、寧ろ素朴

な姿なのであり、そこに露わな反感をそらしめなような自然さもないではない。或は、そこまで墮落し切つているのかも知れない。いわばそれは「ねむつて居る」状態。今では何処でも見られる、寺院在家の、至極当り前な風景、念仏者の戯画を思わせるものでもある。

が、鈴鹿にとつて「念仏がひどく無力」(頁九二)なものに思えたのは無理もない。形式的な、習慣的な、職業的な、それはつまり偽善的なものがあればある程、須磨の臨終が鈴鹿の目には無慙を極めることになるのである。

「ねどこは、たれながしの為腐り、置もくさらし、床板まで色がわりがしていた」(頁九三)ような寺院の妻女であつた須磨の臨終。その無慙さは、心のみにくさをさらけ出す如哉の無慙さにも通じる事ではないか。「祖母(須磨)はすぐわれたらどうか」「信心のさだまつているたしかさを本人は意識していただろうか」(頁九四)この幼い鈴鹿の疑問。それは宗教に対して、うぶな、不案内者の疑問であろう。それは然し、親鸞思想に不案内な一般読者の質問でもある。「宗教とはよくよく正気のあいだの問題だ」(頁九四)鈴鹿はこうきめつける。須磨と信心。

隠居所に訪ねてくる檀家の妻女に説教した彼女。須磨はでたらめを話してはいた訳ではないであろう。仏の救いを囁んでふくめる様に話していた彼女。然しそれは所詮、親鸞の形骸だけ追つて唯、職業的な受け売り、安売りをしていたにすぎない。作者は彼女に真に宗教的な何物もなかつたと断定している様である。念仏を唱えながら宗教とは無縁のともがら、親鸞とは何の関係もない無宿善の徒。その一つの典型的なものとして須磨が描かれているものの如くである。その様な者は何時の時代にも、何処にも無数に存在するであろう。我々の四囲を眺める時、そこに無数の須磨が居る。この私をも含めて総てが須磨的な存在ではないのか。あゝ併し、須磨と如哉、その違



いは何処であるのか。丹羽は、信心者、真の念仏者、親鸞の徒、とそうでない者との区別を「信心のさだまつて  
いるたしかさを本人が意識していただくか」という甚だ気にかかる言葉で行はうとするかにも見える。恐らく  
そうではないであろうが、この叙述が一寸不明瞭である。それでは反対に「信心のさだまつているたしかさを  
意識している状態が正しい信心者の状態か」と言えば勿論、決してそうではない。この場合の、須磨に対する、  
鈴鹿の批判の言葉としては適當であつても、それは真宗、と言うより、広く一般宗教への入口であり、真の宗教  
との対決はこの後の問題である。と言う事は、之が決して、きめてではないと言う事である。常に自身の信心の  
確かさを自覚している状態、これが正信の状態であろうか。弥陀の絶対の救済を、大慈悲として賛仰するのはよ  
い。だが賛仰の心に直結する、別の自意識そのものとは飽くまでも別である。人間の心にひそむ獣性と深遠きわ  
まりなき汚辱に対する目覚め、それは一刻もその人を安閑とさせて置きはしない。(註7)つまり法の深心じんに対する機はりの深  
心である。一口に言うなら、そして全く正しく言うなら、救済観念を、救済の自覚の固定化を極力排したのが親  
鸞であり、それが他力の教えなのである。「信心の自覚」自分が信じている心の状態をよりどころとするどころ  
ではない。仏の救済をそうあるべきものと受け取つても喜べないのが人間と言うものだというのが親鸞の教えな  
のである。

——念仏まうしさふらへども、踊躍歡喜の心おろそかにさふらふこと、またいそぎ浄土へまいりたきころのさふらは  
ぬは、いかにとさらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに唯円  
房おなじころにてありけり (歎異抄、第九章)

安易なる救済観念を親鸞程、極力排した者はあるまい。この事に不案内な作者ではあるまい。ならば、この正

信の在り方をこらで多少は説明するなり、暗示するなりして欲しいところではある。これはこれで暗示なり、伏線なりになつてゐるのかも知れぬが、これでは余りに曖昧であり、断片的に過ぎる。

夜の茶席に未亡人の梅原さんをひき入れた如哉、既に痴情に飽いた無感動な態度。そこには人間的な誠実さや愛情の一片すらない。唯あるものは習慣的な、ただの性欲そのものである。相交らずの如哉のふてぶてしさ。だがここまでそれが徹底して来ると、如哉も又性欲に罰せられた男としての姿を呈して来る様ではないか。情人を迎え入れる歓喜もなければ情緒もない。誠に罪そのもの人間像である。持つて生れた性欲に身一杯に復讐されてでもいる様な如哉の姿には矢張り一種の宗教的対決を迫られている者の姿があると見るのは筆者の甘き考えであらうか。此の総てを投げ出してかかつてゐる、無手の<sup>かつち</sup>恰好は背後に頼りとするもののあるを感じしめる。之を裁く者のあることを思わしめる如くである。如哉を裁くもの、その裁き手とは何か。

この時如哉は六十二才。晩酌をたしなみ、豚や牛肉のあぶらのところを特に好み、肥つてはいるがその首はがつしり太く膚はつやつやして、はだかになつたところは四十代のさかんな気力がいまだ温存されているようである。情人の梅原さんは時間と物質にめぐまれた日常生活が自づとその態度にあらわれ、何となく満ち足りている。この二人が衆人の中で平然と念仏三昧の姿に浸つている。

——念仏と情欲を、どう調和させてゐるのか（頁一三一）

幼い鈴鹿の疑問ではある。梅原さんの満ち足りた態度には懷疑がなく、不安もなく矛盾も感じさせない。如哉は念仏と情欲のあいだに或る種の調和が出来ている様にすまして居、その腰をふかく下した念仏三昧のすがたは

さとりにはいつた人間を聯想させた。(頁一三二) ここには或る種のおさまりがついているかの如くである。紙一重の差でそれは、実に凶迂々々しくいやらしく、矛盾して、いかにも無慚無愧の振舞そのものである。幼い鈴鹿の質問は「魂のすくいとか信心とか言う、いはゞ非現実的問題を現実的な感覚で、心理で理解しようとかかっている態度」(頁一三三)ではある。併しかゝる真摯な問いは先ず発せられねばならぬものであつたらう。念仏をとなえる上からは、心から安心、信心を得てのその感謝感激のほとぼしりの念仏でなければならぬ、であつてみればこの様な恥知らずな振舞はどうした事であらう。せめてこの念仏の姿に悩みや苦悶が浮び出て来なくてはならぬ、之は或る程度この青麦を通読する者のひとしなみの質問ではなからうか。

ここでもう一度思われねばならぬ事、それは真宗の念仏は悟りに到る手段ではないと言ふ事、又は悟つた境界を現実に表現してみたものではないと言ふ事である。それはひたすらに報恩の行そのものであり、弥陀に対する賛仰である。確かにそれは、ここにあらわされていると見られる様な、いけ凶迂々々しいものではないであらう。併し或る種の公式の原理や条件の様に劃一的なものでは又決してないであらう。念仏は各人の受けとり方であり、各人各様の生活の内容である。別に涙を流しつつ唱えねばならぬものでもない。ここにこうあらねばならぬという一定した姿がある筈もない。如哉がどうあらねばならぬ、外形の念仏の姿にどう現われねばならぬという事はない。念仏と雖もそれは飽く迄も現実の人間の一つの相である。ここに然し、永遠に解き難き宗教の一大課題が横わるが如くである。即ちそれは、信仰と現実生活の問題である。真宗では古くから、之を真諦門と俗諦門とに分けて此の問題をとり上げている。教義的にはその大綱は一応の解決がつけられている。然し、信仰とは、

そして信心とは既に固定した救済観念を指すものでない以上、それはきままる処を知らぬ深遠さを具えている。苦悩に打ちひしがるべき如哉にはふてぶてしい、平然とした、そらとぼけた外面があつた。多分に、というより全部的にそこには職業化された習慣的な、自分自身の意識にもぼらぬ、一口に言えば訳のわからぬ口誦念仏があつたに過ぎない。仏への感謝報恩の念に溢れたものでは決してなかつた様だ。併し又思う。その中に非現実的なもの——現実では絶対に頼りにならぬ或る確かなもの——への呼びかけが無かつたかどうか。念仏の会の他の者も同様である。この檀家達の甚だ漠然とした態度の中に、それこそこの様な宗教的雰囲気を集める気がなかつたかどうか。求めるというのが強ければ好くと言つてもいい。この様な雰囲気浸る事の快よきのあつた事は否定出来まい。凶迂々々しさや、非良心さ、併しそれも究極のところ、単に無力者という事ではないか。無力なるもの、そしてそれより他に、人間には何があつたらう。実は人間は結局、それより他の何者でもなく、そう在らざるを得ないところのものがこれ等の人達の念仏の姿であつたのではなからうか。丹羽のこの辺の描写は確かに説明不足であり不充分であり、理解に困難がある。然し何とも形容し難い、それこそ人間凡情、煩惱の只中に坐つているのが如哉の念仏の姿なのではあるまいか。

## 6. 大悲無倦常照我

——如哉が念仏を唱えているのは、このようすがたを特にひとに見せるためではなかつた。本山から末寺に命じられた念仏の会でもなかつた。はじめた動機はどうであつたにしろ、六十のなかばをすぎた如哉の念仏を唱えるすがたは、たしかにたれかに見られている恰好であつた。目に見えない目でながめられているようであつた。その目を如哉は感じ

ているらしかった。その目のまえに、おのれをさらけ出していた。(頁一四三)

この様な凝視をかくも露わに、安つばい神秘感なしに文芸の上に表現し得たのは殆んど丹羽の独創ではないか。極重悪人の凡夫の上に大悲の常照を設置した事は真宗教義の上では至極平凡な事柄ではあるが、この様な肉付けを施し得た事は丹羽の手柄である。如哉の極彩色なまでの煩惱の姿の上にこの凝視をもつて来た事一つで「青麦」は近代文芸の一異色たるを失わず、他の追従を許さぬ「創作」として独自の位置を占めるものと私は思うのである。

——その目は如哉を叱りつけはしなかつた。こうしろと何も示しはしなかつた。その目は如哉の感情や意志を束縛しなかつた。現世的には力のない目であつた。如哉が一心に念仏を唱える姿勢を、その目はじつと眺めている。その目は、慈悲、大悲、永遠の凝視であつた。仏の目であつた。(頁一四四)

最後の一句は、正に千鈞の重みがある。大魔術のタネ明しの様なものである。永遠の凝視を己が身にひしと感ずること、それは親鸞の教えの面目である。それは信仰への入信の機微を語ることであり、信獲得の秘密を明かすことである。「信心とは永遠の戦慄である」と亀井勝一郎氏はいみじくも道破した。深夜の床に端座する如哉の感じてゐる凝視、その曇りなき非現実な凝視。非現実的なるが故にそれは又永遠でもある。永遠や悠久や無限は共に現実の此の世のものではない。例えばそれは芸術を通じて味わえるものでもあるうか。その実在は時間空間の法則のもとに証明せらるべきものでなくて、宗教を通して感じられるものである。信の一念に於て主観的にとらえらるべきものなのである。いや、凝視に会う事、会わしめられることそのことを「信」と呼ぶのである。

凝視に会うべくして会わしめられた者が、他力の信心を賜わりたる者、念仏の行者たるものである。永遠の凝視

に応えるところのものは如哉にあつては永遠の戦慄であつたというのは正しく浄土真宗的な体験の境地に如哉が居ることを意味するものであるとして差支へはない。坊主の癖に如哉は未だ悟りに達していない。「併し今ではさとるさとらないは問題ではなくなつている」(頁一四五)というのはこの意味である。煩惱を恥かしいことだと思つてもそれは生きている彼の肉体そのものの内容であつたという。肉体といわずそれは如哉の存在そのものであつたのだ。

——如哉が自分につとめていることは、罪や不安や、さとりをひらいていない自分を、そのままとめるということであつた。これ丈の人間だと正しい自覚を持つことであつた。(頁一四五)

どうにもならない自分だとやけを起しているのではなく、「煩惱成就(註9)の凡夫にてただ飾る所なき姿にはんべらんこそ浄土真宗の本願の正機なるべけれど正しく仰せありき」(頁一五一)の親鸞の言葉の蔭にかくれようという気はみじんもなく、この言葉を咬いた為に一層胸騒ぎを覚え、犯行を指摘されて、動揺する罪人のようであつたとは、浄土真宗の行人としては理想に近い在り方ではないか。「信心を得たならば人間は救われる」と鈴鹿は考へた。真宗に於ては、信心とは、対立する信と不信とを超えた第三の立場にあるところのものであつたのだ。それは決してこちら側に属するものではなかつた。こちら側にあるものは、たゞ悪業煩惱であり、己のはからい、がこしらえあげた錯覚たる「信心」に過ぎない。自分の足下に横たわる影はこちらの側のものである。然し乍らこの影を否応なしに見せしめている光、これが凝視なのである。影の存在を認めた者には「光」の存在も認められる。それが入信だ。残る隈もなく自己の影を見せしめられている者にとつて、あちら側の光は疑いもなき事実で

あらねばならない。蒲団の上に端座した「如哉の胸の底に悲哀が凍りつくようであつた」（頁一五一）と丈であるのはどうも物足りぬ描写ではないか。二種深心から言へば、機の深心、我は罪悪深重の凡夫なりとの自覚の上に立つ者に法の深心、弥陀の救済は絶対なりとの法悦のないのは片手落ちではないか。法悦のみに浸つたまゝの状態、つまり常識的に鈴鹿が解釈し、求めた様な、悟り澄した境界が、一つの迷妄なら、慙愧ばかりという事も又あり得ない。如哉の生活に、もつと女犯に狂奔し、永遠の凝視に戦慄するものあつてよいのと同じく、賛仰の心や、歓喜的生活内容もあつて至当であると考えられる。

如哉が救われたかどうか。之は青麦全篇を貫くテーマである。誠に途方に暮れる様な難問である。誰れも之に答える事は出来ないであろう。丹羽がこの一篇を通じて我々の前にそれを提出し、身一杯に叫んでいるところのものは実にそれなのである。

——極楽往生でした。世話方も、死にぎわのきれいなのに、おどろいていました。父は救われていたと思います（頁二〇三）

この泗朗の言葉に対して、鈴鹿は、それは多分に主観的な子供の考えのように思われる。ここところは如哉の人間描写として至難の業に属するものであるに違いないが、何とも曖昧ではなからうか。何もかにもが一步手前の感ではないか。

たゞ、例の伊勢子の悲劇に際しての如哉の心の描写——如哉は伊勢子の悲鳴を聞いた。救いをもとめる悲しい声は、如哉の喉をくだり、はらわたりしみた。その声をふせぐ事も、その声からかほをそむけることも出来な

つた。わが子の悲鳴が如哉の胸にひびいてながい余韻を残した。かれはじつと聞いていた。(頁一七三)——は誠に光つて居り、非現実的な眼の凝視にあつている人間が現実につき当つての姿そのものとして完璧に具象化されている。これでこそが小説である。如哉の救いなき業の深さと罰せられ方のその詳しい描写。誠に申訳けなき呆れ果てた生嗔坊主でありながら、外面が福德円満の相である事が余計その罪業の深さや救われのなさや、何とも知れぬ無慙さが印象的に読者に迫る。後妻イトの入水自殺に關聯して参考人として警察署に呼び出された如哉の態度も誠に立派である。「イトの死は如哉の罪であつた。それをまともに感じてゐる心には、秘密も恐怖もなかつた」(頁一九二)。単に度胸の良い人間というに止らぬ、地面に足のついた、人間としての確かさがあるではないか。「イトは軽卒なことをしたものと思ひますわ」(頁一九二)に始まる如哉の言葉は、人生の達人の言と云つても敢えて過言ではないだろう。警察署を出て、如哉は田圃道にさしかかるが、よたよた歩く姿が罪の重さを持つて余しているように眺められる。禿げたあたまは、あぶらぎつていた。「如哉の口からは自然の呼吸のように念仏がもれた」(頁一九四)、この念仏の在り方こそ最も自然な念仏であり、歎異鈔にいう「たゞ念仏して」に通うものがあるかとさえ思われる。

## 浄土真宗の救いとは何か

深夜の端座にあつて如哉は戦場の兵士が死にぎわに「お母さん」と呼ぶその事を思い浮かべる。そしてその一言を、戦場という恐ろしい現実にあり乍ら、非現実的な世界への呼びかけだと感じ、彼等がそう叫んだときに彼は救われていると考えたかつたというのは適切な引例であると思える。又臨終に近く、或る政治家が死ぬ十二時



間前にキリスト教徒になつた事を思い出し、人々は笑つたが如哉には笑えなかつたとあるが、まことにその通りである。たゞ丹羽の筆が「十二時間のキリスト教徒がはたして救われたか、どうか詮義だてすることは無用であつた」(頁二〇〇)と述べているのには不満を感じる。救済とは、そして入信とは人間の魂の救済に關することである。宗教の目的が絶対的存在になる事、ならしめらるる事にある以上、永遠の生命を得るか否かの問題である。十二時間がたとえ一時間、一分間であろうと時間は問題でない筈である。それより私にはその後につづく、

——如哉は非現実なたれかの目が現実的にうけとれるようになっていた、そのことを言うとなると、たくさんの言葉を使わねばならなかつた。(頁二〇一)

という一句が重要である。この一句の解明やその具象化がこの作品の奥を掘り下げさせ、この方面への、より明確な作品化を促がす。この辺の描写も、たとえ暗示的なものにしる伏線的なものにしる、もつともつとあつて良かつたのではないか。一歩手前というのはこの意味でもある。或は今後の作品にそれは望まらるべきものであるのか。丹羽に求めるものの最大のもはこれである。

## 7. 丹羽文学の本質と今後

丹羽の文学が、生母とマダム、この二人の女性によつて開眼し、愛欲、それも女性を主体とする愛欲が終生のテーマとなつた事は前稿に於て述べた通りである。この事情は現今も勿論變つていない。青麦に散見する女性描写の一つの特徴をここに挙げてみる。

——指をいれて扶つてみたい誘惑を感じさせる程、須磨の眼はがつくりとおちくぼんでいた。(頁一二二)

孫の鈴鹿の眼を通して描かれている丈にこの形容はえげつない。又義母が急死した時の描写、

——庫裡の世話方のたまりの間にうすべりが敷いてあり、義母がひとえをきたすがたで横になつていた。……魚河岸のコンクリートの上にはふり出されたまぐろを鈴鹿は聯想した。義母は固肥りに肥つていた。(頁一二五)

なども同断である。後妻イトの死体の描写の処も

——イトは下部屋に横にされていた。ぬれた雑巾のようであつた。下部屋の畳は、めくられていた。床板をぬらしていた。死んでしまうと、イトはいつそ小さくなつた。叱られた子供のように、頸をまげ、両手をにぎりしめていた。(頁一八六)

何も顔の形容や死体の描写には限らない事であるが、こんな筆の端々に一種の酷薄さの感じられるのは、極端に言つて女性に対する憎悪の感情の現われでないか。如哉が手籠め同様にして関係を結んだ、お加代のところで彼女は次第に大胆になり、おそれに対して無神経になる。

——お加代は「罪悪」をよるこんで迎えた。火をつけ、逆上させ、燃えさからすにふさわしくお加代は、中年ふとりがしていて、成熟し切つていた。如哉は復讐されているようであつた。(頁一七八)

女性が罪悪を好む。そう言えは、後妻イトが伊勢子の秘密を知つて、ねちねちとそれをさいなむ。

——イトは罪の快感にうつとりした。同時に、罪をさばく道義的な立場の快感も味わうことが出来た。氣にいつたこの遊戯からは、めつたなことでは目を放すわけにかなかつた。(頁一七六)

女体が罪悪を好むとも言えそうである。快楽、快感に罪悪は欠かしてならぬ最高の要素であり媚薬である。物

欲色欲の権化の様な須磨が既にこの面でのエラ物であり、随分とイトのこの遊戯も好みそうである。生母又然り、丹羽の筆にかかれれば、御邪気な、そで子や清純な娘伊勢子とて或はこの例外たり得まい。加代との情交のあと、如哉はいくらおそく床についても真夜中に起きて罪悪感にこづきまわされ果は神妙になつた。が、お加代は家族のよくねむつてゐる家のなかに足音をころしてはいると、くらがりの中で自分のとくに倒れた、重量のある丸太棒を倒したように、そのままふかい眼りにおちこんだ。「一、三日は如哉のことを思いだしもしなかつた。男と逢つて、身体がすつとする、そんな女ばかりではあるまいに、この様な女性を丹羽は好んで書く様だ。罪と愛欲、女性と快楽、女性は又天性宗教の愛好者でもある。丹羽は余程、この女性悪に目をさまされた人間である。女体にひそむ罪のにおい、そこには、現実の男性女性の特質を超えた業の深さが宿る様である。親鸞思想を武器にして以後丹羽は、罪と救済とを追求する。その場は遂に、終始一貫して変わらず、「愛欲」なのである。女体と悦楽と宗教と、これをかほどまで密着させたところに丹羽文学の特質がある。

青麦以後の作品について一言すれば、「菩提樹」(昭・三〇・一〇)はより、長篇的構成とフィクションを持つて如哉的不倫を犯し乍ら或る一人の婦人に対する愛情を契機として宗教的信念のもとに一切を檀徒の前に告白して寺院を去る若き一人の僧を描いたものであるが、作者の意図と包負に反して、この浄土真宗の人間性の追求という点には、一般的に解りいいかも知れないが、メロドラマ的で深さに於て欠ける。私は大いに失望した。「飢える魂」(昭・三一・六)、「日日の背信」(昭・三二・四)は登場人物やストーリーに於て類似性が目立つが何れも青麦をその思想の基盤としないものはない。青麦を書いて丹羽はすつとしたであろう。客観的リアリズムに終始する風

俗小説、男女愛欲の場に於ける暗中模索から眼まなこひらかるる思いがした事であろう。以後丹羽の作は常にこの人間の救いとは何かを追求し、一作毎にその深さを増している。丹羽の健闘を祈らざるを得ない。

青麦が何故問題作か、そして何故にそれが傑作なのかはほぼ説きつくしたかと思う。生母もの、マダムものに加えてもう一つ、真宗まねもの、とも言うべきものが夫等を綜合し結実したものの力強さをもつてここに姿をあらわすこととなつたのである。(完)

— 昭和・三三・九 —

註 (1) 「青麦」は初め昭和二十八年十二月、文芸春秋新社より書下し長篇として発刊され、後同社より昭和三十年七月、新書版タイプのものが出され、昭和三十一年九月更に新潮文庫に収められた。本稿の引用文は凡て新潮文庫版に  
より、頁数を入れた。傍点は筆者。

(2) 具体的作品としては昭和二十六年十月「群像」に発表した「幸福への距離」を指し、「遮断機」も「青麦」も、その延長であり、発展である。

(3) 丹羽の小説に対する志賀直哉の影響は、その文学的出発に於て著しく見られたところで、前稿に触れた通りである。(論集第三卷・第二号頁一〇九)

(4) 昭和二十八年十一月。相愛学園刊行の「文学と人生」(頁六八)

(5) 前稿、頁一〇六。随筆「幼な友達」(選集第七卷・十一頁)

(6) 昭和二十八年十一月の文芸春秋新社版のあとがきに「父親をモデルにした」とあり、随筆「父の墜落」その他の作品に明瞭にうかがわれる。

(7) 散善義、三丁以下、「深心と言ふは、即ち是れ深く信ずるの心なり。亦二種あり。一には決定して深く、自身は現に是れ罪惡生死しよんかの凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと信ず。二には決定し

て深く、彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を摂受す、疑ひなく慮なく、彼の願力に乗じて定んで往生することを  
得と信ず」

(8) 正信念仏偈「煩惱障」眼雖」不見。大悲無」倦常照」我。」

(9) 口伝鈔(第十七章)

(10) 歎異鈔、第二節。

(本学講師国文学)